

平成21年 5月 13日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2009
課題番号：18320097
研究課題名（和文）東アジアにおける戦争・植民地記憶の保存と表象に関する国際的総合研究
研究課題名（英文）International general research about a save and representation of the war / the colony memory in East Asia
研究代表者
君塚 仁彦（KIMIZUKA YOSHIHIKO）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：00242230

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：東アジア・戦争・植民地・記憶・表象・保存・博物館・戦争遺跡

1. 研究計画の概要

本研究は、中国・台湾・韓国・ロシア（沿海州地域・サハリン地域）・日本などの東アジア各地を対象として、19世紀末から20世紀にかけての戦争と植民地統治をめぐる記憶（戦争記憶・植民地記憶）がどのように収集・保存され、調査・研究され、公開・表象されてきたのか、されているのかを4期に分けて実証的かつ比較歴史的に調査・解明することにより、東アジアにおける戦争記憶・植民地記憶の保存と表象の歴史的意味・意義を、国際的視野から総合的に明らかにしようとするものである。

2. 研究の進捗状況

(1) 海外における調査研究について

これまでの3年間にわたる国際的な共同調査・研究により、海外では、研究課題の柱とする中国東北部および華中地域、韓国本土および済州島、ロシア・サハリン地域における戦争・植民地記憶の保存と表象に関する具体的なあり方について、これまで認知されていなかったものも含めて調査・解明することができた。

特に、中国・韓国におけるローカルレベルも含めた現地研究者や当事者からの専門的な知見やオーラルヒストリーについては、これまで日本国内で認識されていなかった学術情報の収集という点からも、同時に、今後、研究を発展させていくための人的ネットワークの構築という意味でも、一定の成果をあげることができたと評価している。

(2) 国内における調査研究について

これまでの3年間で、九州北部地域および沖縄、北海道に点在する戦争遺跡、また東京

都心部にある戦争遺跡等について、現地の研究者との交流を踏まえて調査を行った。

また、これまで戦争遺跡とは分けて認識されていた国内のハンセン病患者隔離施設に残る戦争記憶についても積極的に調査を実施した。

(3) 国際シンポジウムおよびフィールドワークの実施

本研究の特色のひとつである、現地研究者および当事者との学術交流・人的交流については、東京、韓国（釜山）、中国（延辺・河北）における国際学術シンポジウム、そしてフィールドワークをセットにし、実施することができた。

また、このことにより、戦争遺跡・植民地遺跡に関する国際的な研究ネットワーク構築への足がかりを作ることができたと共に、研究方法論の多角化、そしてその共有という点でも一定の成果をあげることができた。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

（理由）

本研究課題が「東アジアにおける戦争・植民地記憶の保存と表象に関する国際的総合研究」という大きなものであるため、前述したように国内研究者だけにとどまらない、東アジア全域にわたるフィールドをカバーする海外研究者との国際的な研究ネットワーク構築が研究の成功を左右する条件であったが、一定程度、その目的は達成されつつあると評価できる。

同時にそのネットワーク力を生かし、各国・各地における戦争遺跡・植民地遺跡意に関するフィールドワークを精力的に実施してき

てはいるものの、しかし、アジア・太平洋戦争における日本の侵略範囲は広大であり、いまだ中国・韓国・ロシア・台湾等における調査はその終わりを見ることができない。日本国内で知られていない戦争遺跡・植民地遺跡も多数に上り、当時を知る体験者の聞き取りも、残された時間との勝負になっている。その点で、研究を総体としてみた場合、おおむね順調に進展しているものの、新たな課題も生じてきている。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 今後は、調査地として残された地域である台湾を中心に、国際比較の観点も含めて研究を推進していくことになる。

共同研究の課題である中国の戦争・植民地記憶の研究、総合的中期構想研究を研究の柱に立て、台湾における国際学術フィールドワーク調査を台湾教育大学との連携のもと開催する（東アジア教育文化学会主催への協力）のをはじめ、研究目的を達成していくための補足調査等（韓国）および比較調査（ドイツ）を実施する。

(2) 本年度は総合共同研究の最終年度に当たるため、総括的学術会議（東京）を実施し、研究報告書作成に向けての作業を確実に積み上げ、報告書を完成させ研究成果を社会に還元していく予定である。

なお本年度共同研究に際しては、研究協力者ネットワークとして、国内では王智新（聖トマス大学）・又吉盛清（沖縄大学）・石純姫（苫小牧駒澤大学）・蘇林（北海商科大学）・近藤健一郎（北海道大学）・広瀬義徳（関西大学）のほか、海外においては、許寿童（スワトウ大学・中国）・朴晋雨（淑明女子大学校・韓国）・崔仁宅（東亜大学校・韓国）、柳教烈（韓国海洋大学校・韓国）の各氏をお願いする。

また国内の博物館関係者にも研究協力を仰ぐことになったが、本研究課題に密接な関連を持つ博物館の学芸員に協力を依頼することとする。具体的には、金貴粉（国立ハンセン病資料館）、稲葉上道（国立ハンセン病資料館）、西浦直子（国立ハンセン病資料館）、黒尾和久（国立ハンセン病資料館）、李美愛（在日韓人歴史資料館）の各氏をお願いすることになった。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 君塚仁彦「異文化」とされる側の記憶と表象-在日朝鮮人と博物館運動-、国立歴史民俗博物館研究報告第140集、185頁～200頁、2008、査読有
- ② 金哲、「満洲国」期の朝鮮開拓民、東アジ

ア教育文化学会年報第4号、35頁～2007

〔学会発表〕（計2件）

- ① 君塚仁彦、日本の戦争遺跡保存と東北アジア平和構築の課題、東北アジア平和ベルト国際学術会議、2008.12、ソウル国際会議場、韓国・釜山
- ② 又吉盛清、沖縄人の中国東北フィールドワーク、東アジア教育文化学会国際学術シンポジウム、2007.8、延辺大学、中国・延吉

〔図書〕（計1件）

- ① 君塚仁彦編著、明石書店、『平和概念の再検討と戦争遺跡』、2006年、340頁